

幼児の心と造形表現



第一話

ある日の絵の話

ゴルフでも野球でも、よくスポーツ用語として、「リラック
スする」とか「リラックスに」とかいう言葉がよく使われる。
リラックスとは、力を抜くとかゆるめるという意味だから、心
の緊張をとりて、体もコチコチにせず、心身の状態をごく自然
に柔らかくしなさいということである。

リラックスしないと、打つべきボールも打てないし、跳躍な
どもファウルばかりするという結果になる。

オリンピックの時に、確か市跳びの日本代表選手だったと思
うが、暗れの舞台で、三度ともファウルをして、したたかに世
の酷評をあびた気の毒な事件があった。

テンション民族である日本人の悪いくせだが、いざ本番とな

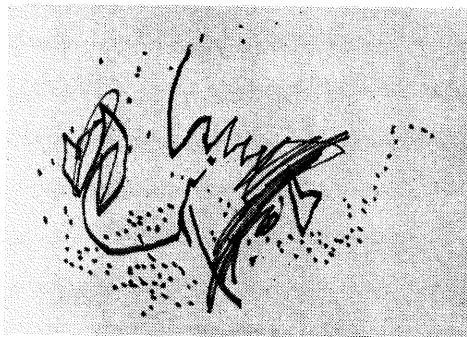
ると、もう極度の緊張で、身も心もコチコチになって、おそら
く練習では何万回も跳んで、ふみ切りなどは空んじているはず
の線をふみこしてしまうという妙な結果になるから不思議であ
る。何事でも、人間は解放された精神の場合には、伸び伸びと
力もでるものだが、妙に緊張してしまう時は、本当の力はでな
い。幼児の絵の表現の場合もこれとまったく同じことがいえ
る。

ただ絵をかきなさい。といえば、子どもは何のくつたくもな
く、すらすらと描くものではない。心の中のいろいろな問題と
斗争し、決断し、大勇猛心を描いていることもある。教師は案
外このようなことを見おとしがちである。

次の絵は、以上の問題を実によく、われわれに教えてしてくれ
ている。話はこうだ。

林 健 造

①ママの机からだまってマジックをひきだしいつ叱られるかと描きだした。



ママの傍の画用紙が数枚
積み重ねられているの
に眼をつける。

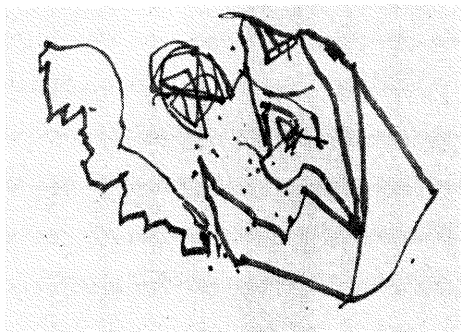
写真①

最初は点々とただマジックを紙にぶっつけていく点から始まる。「しょうがないんだもん。ママ遊んでくれないしき」
「ほかの先生方たくさんみていていやだなボク」

私の同僚の息子で、今年三才十か月の坊やのかいた絵である。この日、教室のママのところに、幼稚園帰りのこの坊やが入ってきた。ママの先生は、ご自分の机で、まだ忙しそうに学級事務をしていて、この坊やのお相手はできないようだ。

坊やは、ママのそばでしょがないきそうにしていたが、そこは幼児で、じっとしているはずはない。そろそろオイタが始まる。片袖の机のひきだしを開けて、「何かいいものないかな」などとのぞいてみる。坊やはやがていいものを見つけた。マジックインクである。彼はしめしめと、そのマジックインクをとりだして、こんどはかくものを探す。ママの傍の画用紙が数枚

②



「メーッて今に叱られるかな」
おそらく、こんな坊

やの心だったのではな
いだろうか。この絵に
は、無数の点々と、激
しい抵抗を感じさせる
直線のギザギザの線が
力をこめて描かれてい
る。

写真②

「あれっ、ママ叱らないや、また描いちゃおう」と

「二枚目、かくよ。こんどは叱られるかな。早くママお仕事やめて、ボクと遊んでくれるといいのにな。ああいよんなっちゃうな」

この二枚目の絵をみると、やはり点々がある。前よりはやや伸び伸びと腕を動かして描いている。少しだがリラックスされてきているが、まだ直線はギクシャクしていて抵抗感は強い。
ここでママは、気がつく。

「もう少してお仕事おわるからね。あら坊や絵かいてんの。じゃうずね。それじゃあ、そんな狭いところでなく、この広いお

机でかいたら」

と教室室中央の広い机につれていき、画用紙を二、三枚渡した。

さすがは先生のママである。教育的にいかにも指導すべきかなどと考えた処置では、もちろんなかるうが、このさりげない処置が坊やの心を生かしている。

坊やにとっては自分の行動がみとめられたのである。いまにメーッと叱られるかな。

「あらあら大変、またオイタばかり、これ大事なのよ。しようがない子ね」……とくるかなと思っていたのが、まったく逆である。

広い机、坊やはじょうずね。もっと描いたら、とくるのだから、完全にリラックスされるのも当然である。

幼児の絵の指導のあり方とか、コツとかいわれるものは、実際にここにある。

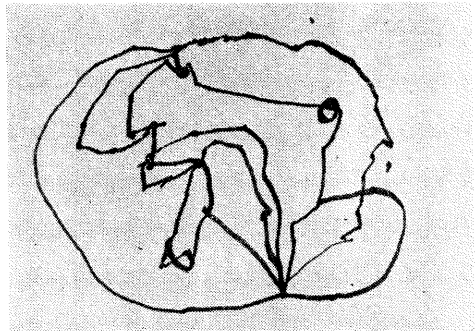
このママは数学の先生で、絵の先生ではない。しかしママとしてもいいかただから、はからずもここに絵の指導の典型をごく自然に踏んでおられたということである。

写真③

「へーっ、じゃボク描いちゃおうーと。ボクね、なんでも描けるんだから」

この絵をみると、先の欲求不満の点々は消えてなくなり、ギ

③



この坊やのそばにいて、新聞などをみておられた。ママは仕事をしていない。そしてボクのそばにいてくれるというこの安心感。

この時、少し離れた場所から、ことの一部始終をみていた私が思わず声をかけた。

「ほう坊や、やってるね。うまいね」と。ママは驚いて一瞬はすかしそうに笑っておられたが、

「坊や、うまいってよ。なにかいてるの」ときいた。坊やは、「みちだよ」と嬉しそうに答えていた。

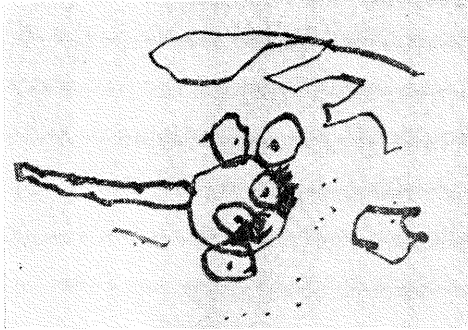
写真④

ザギザの痛いような直線は、美しいならかな曲線に変わり、手先で描いている感じよりも、何か体全体を動かして描いているような伸び伸びとした絵にかわっている。

精神が解放したのである。

ママもこの時は、ちよっとお仕事をやめて

④長いハナ丸いメあれミミが三つになったので失敗だ。すべて円てまにあうものはまにあわせる。

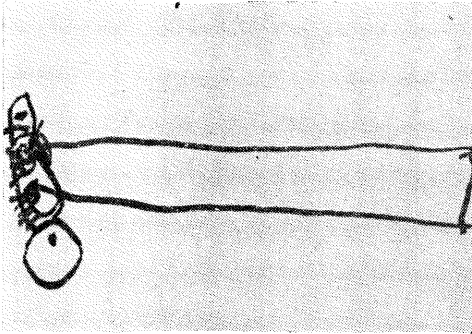


なるほど坊やは象を描いている。眼玉が二つまつげもちゃんと描いている。右に長く伸びているのは鼻である。この年令頃の幼児の絵は、手の運動が横の線や円がかき易いために、早くからあらわれるが、覚えた円を使つて、何でも間にあわせる。ノコキリのキサギサの刃でさえも円てまにあわせているという

さあこい。坊やは安心して、今度は得意のものをどどんん描く。丸い円の大きいもの、小さいの形もしまつてきている。自分の頭の中に描くもののイメージが明確であるしようこである。
「あれつ、ボク失敗しちゃったあ」
と叫ぶ。
「ぞうさんのお耳、三つかいちゃったあ」

子どもはお調子にのると、丸い形など一つ二つ、リズムのつて描いてしまふ。心の状態が快適でいい調子であることを示している。

⑤このすばらしいゾウのとらえかた。ハナは長い長い。



「ママ、この間見た象さんの鼻、スゴイんだよ。こんなにスゴイんだから」といっている坊やの感動をぶちまけたような声がかきこえるようだ。何とすばらしい象の絵であろうか。一枚目の絵と、この五枚目の絵と比較してみると、さして時間は

テルムハイム氏の説を思いだした。なるほど象の眼であろうと耳であろうと、みな円てまにあわせているわけである。

写真⑤

「よしこんどは、しっばいしないで描いてやるね」とばかり次の画用紙に描きだしたのが写真⑤。こんどは象の顔を左すみによせてかいている。眼に長いマツ毛があるのがこの坊やの得意らしい。

さてと、息をとめて、ぐーんと描いた長いお鼻。この線にはスピード感があり、何のためらいもない。

経っていない。十分とはたっていないだろう。しかも同一人が描いたものである。それなのにどうしてかくも違った表現になるのであろうか。

「子どもの絵は、心をのぞく眼鏡である」

とはまさに名言で、子どもの絵は、子どもの心の反映であることが、この五枚の絵は如実に物語ってくれている。

はじめの要求不満と緊張の心が強いときには、はげしい直線が描かれ、次第に心身がリラックスされると、美しい曲線にかわるということは、われわれの日常の行動やゼスチュアにも同じことが表われる。

斗争運動の演説などは、腕を上下左右にはげしく直線運動をするが、ロマンチックな話などをする時は、なめらかな円運動のゼスチュアになろう。

子どもの絵で創造的な表現をさせようというなら、まずこの体も心もリラックスにもっていくことをきいておき、テーマや技法やしつけを先にもってきても、とても人間は自分の力を創造的になど、はきだせるものではない。

第二話

ある日の製作の話

この正月、私の家の坊や（四才三か月）に凧あげをせがまれた。

東北生まれの私には、正月に凧をあげるなどということは思

いもよらなかつたが、東京の子どもだなあと思いながら、近所のお店やさんから凧を買ってきた。さて上げるとなるとこれはなかなか面倒なものである。

「パパ、早くとばしてよう」

とせがむ坊やを待たせて、凧糸をつけたり、紙を切ってしっぽをつけたり、

「しっぽはね、長くつけないととばないんだよ」

などと話してやると、変なものだというような顔をしながらも、じれったそうに私の手もとをみていた。

ところがいよいよよ上げる段になると、広い野っ原であげるわけではない。

東京の凧あげである。いたるところに電線がある。東京の凧あげの哀愁がある。

走ったり、糸をたぐったり、凧にのせて上げるまでには大変な苦勞である。

「パパあげられないの」と信用がない。

やっと凧にのせて、まい上った時はさすがの坊やも大喜び。

それもつかのま電線にひっかかったなと思ったら糸が切れて、それこそ奴凧のようにという言葉通り、ぴゅうとどこかの屋根のうしろの方にとんでいってしまった。

坊やのくやしがること、近所となりをうろろうさがし、

「ネ、ボクの凧どこへいっちゃったの」

と悲しそうにきく、余程残念だったのだろう。

ようやくなだめすかせて部屋にもどると、

「パパ、ポチンかしてよ」

という。ポチンとはホッチキスのことである。

かしてやると、一生懸命紙をきって何か作っている。

「パパ、風できたよ。さ、これとばして」

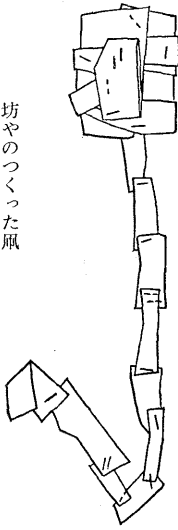
という。

みると紙を折ったものをやたらにホッチキスでとめて、そのしっぽにほそ長い紙片を何枚も何枚もはりつけたものが、その坊やの風だ。(左の図)

「ウワァッ、すごい風だね。えらいな」

などとほめたが、いささか心をうたれるものがある。

どうしても欲しいんだという強い欲求、とにかく風って、しっぽを長くすればいいんだという子どもの推察力、このような中から創造力はうまれてくる。



坊やのつくった風

子どもの造形表現の中には、絵や粘土のような感情の表現の世界とともに、ものの用を考え、その目的や、条件にあった適応表現を主とするデザインとか、保育でいう製作という世界がある。

従来、子どもの造形表現は、主に絵をかかせておけばいいという考え方にだしている傾向が強く、幼児に適応表現なんて：という主観的な考え方だけで、あまり用や条件のある造形は取りあげられなかった傾向があった。

ところで、この風の例でもわかるように、幼児はこのような欲求がむしろ強いのではないかということを、強く考えさせられるのである。

幼児の遊びの姿をみると、そのほとんどのは、むしろ適応表現ではないのだろうか。

逆に純粋な形の感情表現の方が少ないような感じがする。教師がとくに阻止しなければ、絵をはさみできりぬいたり、画用紙に穴をあけたり、粘土で象を作っても、そのまま鑑賞しているということはない。むしろ、それを使って、歩かせたり、ひっくりかえしたりして遊んでいる。

まさに、幼児の造形活動の中で、この適応表現といわれる世界の開拓や研究こそ、今後の幼児の造形の問題を解く鍵をもっているのではないだろうか。

(お茶の水女子大学)